
紅の皇帝

葉月 航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の皇帝

【Nコード】

N2189V

【作者名】

葉月 航

【あらすじ】

獅童春斗は主家である朱前家の命に従い、朱前深夜の護衛として共に日本有数の魔法学校「白桜高校」へと進学した。嫌々ながらも向かった先で少年は一人の少女との出会いを果たす。その出会いがもたらすものがさらなる争乱と因縁であるとは知らずに……

序話 護衛と主と

都会の夜は明るい。たとえ時計の針が12時を回っていようと、絶えずさしこむ街の光が夜を照らし、人の動きが絶えることもない。だが、止まるはずのない都会の喧騒はここでは聞こえなかった。まるで現実から隔離されてしまったかのようにその公園は暗く静まりかえっている。

その切り取られた空間のなかで動く人影が二つ。その二人を取り囲むようにまわりから犬を模した何かが現れる。野犬のゆうに二倍の体躯をもつ魔犬と呼ばれる生き物は二人に向かって牙をむき唸りを上げる。

「1……2……3……4……。全部で20と、それにでかいのが1匹か」

中心に立つ二人のうち黒髪の少年が周りにいる魔犬の数を数える。目視で来ている魔犬の数は8匹にもかかわらずそれよりも多くの数を示した少年は、その奥の暗闇を射抜くように見つめている。まるで闇の中の存在が視えているかのように。

「またずいぶんと多いね。都会に魔犬がいるだけでも珍しいのに」「まったくだな。こんなに増えるまで放置してたなんて。警察は何をしてるんだか」

もう一人の茶髪の少年が発した疑念に黒髪の少年が同意し呆れたように溜息を吐く。もつとも警察が対処できない事態になったために彼らのような……退魔士……に依頼がきたわけだが。

「ここまで増えてしまうと警察の手に余るのも仕方ないよ。さあ手

早く仕留めよう、春斗はると」

「そうだな、任せたぞ、深夜しや」

意気込む深夜と呼ばれた茶髪の少年に、春斗と呼ばれた黒髪の少年はやる気のなさそうな声で答える。

深夜はその声の主を半眼でにらむが、当の本人は何食わぬ顔であくびをかみ殺している。よくみると春斗の目線の先は暗闇ではなくすでに隅におかれたベンチを捉えていた。このまま放っておくとあそこに座り込んで観戦を決め込みかねない。

「あのね、春斗。なんで君はいつもいつもそんなにやる気がないんだ。第一、君は僕の護衛だろう？ 主をほっぽり出して仕事を任せると護衛がどこにいるんだよ」

「その護衛より主のほうが強いんだから守る必要はないだろう？ それに俺はお前とは違ってどちらかといえばデスクワーク派なんだよ」

サボるための口実をつらつらと並べ立てる友人に向かって深夜が反論しようとした矢先、魔犬の群れが突如彼らに向かってとびかかってきた。魔犬の爪が、牙が二人に向かって襲いかかる。二人とも魔犬から目を離れたのを隙ととっての行動だったのだろう。だが、そんなことで隙を見せるほど二人は未熟者ではなかった。

魔犬の牙が到来するよりも早く深夜は腰にさした日本刀に手をかける。抜刀と同時に刀から光がほとばしった。刀が完全に抜かれると同時に飛びかかってきた魔犬はバラバラになる。まるで無数の斬撃で切り裂かれたかのように。

「さすがは深夜様。いつ見ても素晴らしい剣技です。そのまま全て斬りはらってきてもよろしいのでは？」

魔犬を一瞬で斬り伏せた主の技巧に白々しい謝辞を送りつつ、春斗は一瞬で眼前に幾何学模様を展開する。その模様からほとばしった雷が後方から飛びかかろうとしていた魔犬の群れを焼き払っていた。

「無駄口叩いてないでさっさと終わらせるよ。いつも通り僕が前衛で君が後衛だ」

「はいはい、相変わらず護衛泣かせのご主人様だ」

護衛に先だつて前線に赴く主に憎まれ口をたたきつつ、剣を片手に突っ込んでいく深夜を魔法でサポートする。

春斗が風を呼んでは動きを止め、炎を呼んでは焼き払っていく。

その魔法に合わせて、あるいは魔法に合わせさせて深夜がその瞬速の光刃を魔犬に叩きこむ。

魔法と剣技の連携で魔犬の数も目に見えつて減ってきたところに突如巨大な咆哮が響き渡った。咆哮を聞いた魔犬たちは音のしたほうへ駆けていく。やがて魔犬を引き連れて木陰から咆哮の主が現れた。先ほどまでの魔犬とは比べ物にならないほど巨大な体をもった魔犬がこちらに向かって激しく牙をむく。犬というよりは狼に近いまどつている妖気から察するに先ほどまでとは比べ物にならないほどの力を有しているようだ。

「やっと本命の登場か。深夜、気を抜くなよ」

「まったく、それはこっちがいいたいよ」

真面目なセリフを吐きながらもどこか覇気のない春斗に深夜は疲れたように溜息を吐く。ようは自分が仕留めるということなのだろう。どこまでも楽しようと春斗にあきれつつも、大技の準備のために抜いていた刀を鞘に納める。収めた刀に魔力を帯びた光が集まっていく。

そして、おそらく後ろで楽しんでようと考えているであろう春斗に釘をさした。

「僕が仕留めるから、春斗はしばらく足止めと牽制を頼むよ」

「!?!? ……………おい「頼んだよ」」

「…………了解」

案の定深夜に任せて自分は後方で待機してあわよくば観戦してようかなと考えていた春斗は突然矢面に立てと命令され、面食らったように深夜を見つめる。他に仕留め方はいくらでもあるだろうと抗議をしようとしたが機先を制され渋々了承した。春斗の頭にも主従関係のカケラぐらいは残っていたようだ。

深夜が後方に跳んでいくのを恨みがましく見送ると諦めたように目の前の野犬を睨みつけ、前へと跳躍する。一気に懐に入り魔法で片をつけようとしての行動だったがそれが裏目に出た。

対峙する狼が春斗に向かって吠える。同時に狼の口の中に幾何学模様が踊った。発せられた咆哮が魔法によって固定される。砲弾と化した声の塊は春斗へと一直線にとんできた。

狼が魔法を使ったことに戸惑いはしたものの、魔法陣が構成されるのが視えていた春斗は無理やり魔法で真横へと跳ぶ向きを変える。先ほどまで春斗がいたところには咆哮が着弾し地面を消し飛ばしたあと一歩遅れていれば春斗の体はあの咆哮に吹き飛ばされていただろう。その攻撃の跡をみて春斗は冷や汗を流す。寝転がっている間にされると素早く体勢を立て直そうとしたところに今度は魔犬の群れが迫ってきた。捉えられる前に自身を魔法で加速させ波状攻撃をかるうじて避けていく。

（あの狼、まさか魔法まで使えるとはな。聞いてないぞ税金泥棒ども！）

魔力で自身を強化するだけならともかく魔法自体を発動できる生物は珍しい。それゆえに魔法を使える生物には強力なものが多いのだがこの狼も例にもれず強力な部類に入るようだ。

本当に魔法が使えることを知らなかったのかもしれないが、依頼の際に報告書に書かれていなかった事象のおかげで大怪我を負いそうになった春斗は警察に悪態をつく。予想だにできなかった一撃のおかげで体制を崩し狼と魔犬の波状攻撃に防戦一方である。

(思ったより手強いな。さて、どうするか)

防戦一方のこの展開がどうにかならないものかと深夜のほうに視線をおくと敵が予想以上に強力だと判断したのか深夜が術式を変えていた。発動まであと十秒弱といったところだろう。あと十秒ぐらいならこのまま耐えて発動と同時に避けようかな考えていた春斗だったが、深夜のほうからも視線を感じた。深夜の意図を察して眼を凝らして視てみる。よく視ると深夜が編んでいる術式は威力が高いものだが、範囲が狭いタイプの殲滅術式だ。当たれば確実に仕留められるだろうが、あれでは狼によけられる可能性が高い。

(つまりは確実に動きを止めろということか。やれやれ、本当に人使いの荒いご主人様だ)

主の意図を正確に察してしまった己の能力を呪いつつも、自身の中の魔力を高める。狙いは狼が魔法を放つまでの一瞬。

その隙を窺っていると膠着状態に痺れを切らした狼が魔法を放つために動きを止める。

「今！ - - アクセラ加速 - -」

その一瞬に自身を魔法で加速させ狼へと突撃した。突然の特攻に

多少ひるんだ様子の狼だったが迷わず魔法を発生させ迎撃しようとする。だが、その口から魔法が放たれることはなかった。突如魔法陣が歪み、霧散したのだ。

魔法が発動しなかったその一瞬の隙をついて狼の懐に到達する。春斗はそのまま魔法で脚力を強化し狼の腹を蹴りあげた。狼が悲痛な呻き声をあげて空中に打ち上がる。

打ち上がった狼に魔法で第二波を浴びせようとしたが、魔犬たちは春斗の動きが止まった隙を見逃さなかった。魔法を展開しようとして立ち止まった春斗に魔犬の群れが一斉に襲いかかり牙をたててくる。

「っ！」

体中のいたるところにかみついた魔犬たちはそのまま春斗を引きずり倒す。かなりの勢いで叩きつけられた春斗は地面に接触すると勢いよく碎けてしまった。碎けた欠片が空中に飛散する。

よく見ると倒されたのは氷でできた彫像だった。

「こつちだ、駄犬ども」

声のするほうに魔犬たちが一斉に顔を向ける。いつの間に飛び上がっていたのか、春斗は魔犬の群れを空中に飛ばした狼のさらに上から見下ろしていた。

うまくひっかかってくれた魔犬たちに残酷な笑みを向け、狙いを定めて両手にためた魔法を発動する。

「……白雷……」

発動と同時に真下にほとばしった白い雷は眼下の狼を貫き、その下の魔犬の群れへと突き進む。空中に広がった氷の欠片を媒体に散

らばった雷が魔犬の群れへと襲いかかり次々と消滅させていく。狼を含め生き残ったものも雷に身を貫かれ身動きが取れなくなっている。

「さて、動きを止めたうえに一か所にまとめてやったんだ。外すなよ、深夜」

「言われなくても！ - - ロンギヌス 光神槍 - - !」

地上に狼が落下すると同時に深夜が剣を抜刀した。光り輝く刀身から幾重もの魔法陣が浮かび上がり、そこから発された光の渦が剣先を向けた正面へと突き進む。上から見れば流星のごとく駆け抜ける光の槍は狼を、魔犬を飲み込みあとかたもなく消し飛ばした。

（相変わらずとんでもない威力だな）

決して弱い部類ではなかったあの狼を問答無用で消し飛ばした深夜の魔法に春斗は舌を巻く。あれだけの威力を発したのにもかかわらず地面はおろか周りのものに一切影響を与えていない。莫大な魔力を持つだけでなく魔法の制御のほうも卓越している証拠である。

次から本当に護衛の必要はないんじゃないかなと考えながら、サボりを絶対に許してくれないであろうご主人様に目を向けると、深夜は剣を収め、携帯を操作して連絡をとっていた。おそらく依頼主に仕事の達成を報告しているのだろう。

（それにしてもあれほどの魔物が都会に侵入しているとはな。どうやって侵入したのやら）

現代の都市には人々の安全を守るため魔物の侵入を防ぐ結界と魔物

の存在を感知する探査魔法が張り巡らされている。結界を破ったり、探査の網に引つ掛かると警察に設立されている退魔部署が出動するか、退魔師の所属する協会などに連絡がいく。

だが、あの狼たちは人的被害が発生したことでようやく発見されたものだった。結界や探査魔法の網目をくぐることで自体は不可能ではないものの、あれほどの強力な魔物が今まで発見されなかったのは珍しい事態である。

それゆえに春斗は不可解に思った。偶然と考えてしまえばそれまでだが人為的な可能性のほうが高い。

(まあいい。考えるだけ無駄だな)

いくつか可能性が浮かんだものの面倒なことは全て警察に押しつけようと早々に判断した春斗は思考を停止し、大きなあくびをした。報告は深夜に任せて自分は近くにあったベンチに寝転がる。ついでとばかりに周りに目を向け、問題なしと判断すると公園に展開していた結界を解除する。

結界から解き放たれた公園はまた都会の喧騒へと飲み込まれていくのだった。

序話 護衛と主と（後書き）

はじめまして。葉月です。オリジナルということを受け入れがたい人も多いかもしれませんがご容赦ください。基本一ヶ月に一本ぐら
いのペースで書き上げていきたいと思えます。

第一話 屋上と邂逅と

“魔法” - -それはこの世の理を改変し新たな理を構成する異能力のことである。空間に魔法式を描くことで必要な精霊を集め、そこに自身の魔力を注ぎ込むことで魔法は発動される。だがそれを扱えるのはほんの一握りの才ある人間だけである。自身の中に眠る魔力を解き放ち外へと発現できる者だけが魔法を行使できる。才能に依るその力を扱える人々を人は敬意と畏怖を込めて古くから“魔法使い”と呼んでいた。

「起きて春斗。朝だよ」

「もう朝か。……………おやすみ」

「いいから起きなよ。もうそろそろ出発するよ」

警察への報告を一通り終えたあとそのまま深夜と学生寮へ帰宅した。明日はこれから進学する高校”白桜高校”の入学式だと頭の片隅ぐらいには覚えていた（正確には寝る前に思い出した）ので、式の開始ギリギリに間に合うぐらいを狙って目覚ましをかけていた。そのはずだったのだが何故か目覚ましは鳴るよりも早く深夜に起こされる。寝過したかなと寝ぼけ眼をこすって時計を見ると示す時刻はまだ六時前。何度目をこすってみてもまだ六時前である。本来の起床時間よりは二時間も早い。深夜への文句よりも先に眠気を優先しそのまま二度寝を決め込もうとしたが、すぐに深夜に起こされた。

「入学式は九時からだろう？ まだ早えよ」

「あのね、事前に説明しておいたよね？ 僕は新入生代表だから七時には学校にいくって」

「そうか。行ってこい。がんばれよ」

「君も一緒に行くんだよ。はやく準備しなよ」

そういえばそんな話を何日か前にしていた気がする。深夜は入学時の試験を筆記、実技ともに最高成績で合格していたらしい。新入生代表に選ばれるのもある意味当然だろう。ギリギリでひっつかかった俺とは大違いである。新入生代表に選ばれるのは勝手だが早く行くなら深夜一人で行ってくれと思いつつも護衛の職務をサボったらのちのちうるさいだろうなと考え、仕方なくベットから体を起こし眼鏡をかける。まずは目を覚ますために洗面所へと向かった。

白桜高校は日本有数の“魔法学校”の一つである。魔法学校とは魔法の才がある子供たちを一流へと育て上げるために国が施設を、人材を、資料を提供し運営している学業機関で、日本には全部で九校存在する。自身のあるいは一族の魔術を露呈したくないなどの理由から設立当初は人が集まらなかったが、卓越した人材からの指導や豊富な魔術理論、極秘資料の閲覧権など通うことで得られる利点は多く、今では競うように魔法学校への進学が望まれている。九校ある魔法学校でも特にある三校に国は力を入れており、その三校を卒業することが今ではこの国での一流の魔法遣いの証といっても過

言ではない。その三校が“紫苑”、“碧翠”、そして“白桜”である。

その一校に末席ながらもひっかかった春斗はトップで入学した深夜と共に白桜へと向かっていた。

「そういえばこんなに早く行って何するんだ？」

結局出発が遅れたため深夜にせかされながら道を駆けていた春斗はふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

途中で起こされた上に走らされているのだからそれ相応の理由がほしいところである。

「式の予行練習リハーサルだよ。生徒会の人たちや先生方と打ち合わせて式の流れを一通りやるらしいよ」

「そんなもん前々から終わらせとけよ」

ある程度予想していたとはいえ自分にはまったく関係なさそうだし、そう思うと一気に足取りが重くなる。走るスピードもだんだんと落ちていった。

目に見えて速度を落としていった春斗をひっぱりながら深夜が一つ提案する。

「まあまあ。校内に入ったら自由にしていいいから。せつかくだし図書棟にでも行ってくるといいよ。前からいきたがってたでしょ」

「はあ。そうさせてもらおう。っと、見えてきたな」

白桜には一棟をまるまる蔵書用として使っている図書棟がある。

一般的な魔術書の蔵書量の多さもさることながら蔵書されているも

の中には一般に公開されていない貴重な魔術書や資料も数多く存在している。それを見るのが入学前からひそかに楽しみだ。春斗は少しやる気を取り戻し走るスピードを元に戻す。

そうこうしているうちに学校が見え、校門にたどり着いた。

一刻も早く護衛の任から解かれたかったのですが、すぐに校内に入ろうとしたが、空いている校門の前で急にたちどまった。何もなければずの空間をにらみつけると深夜へとふりかえる。

「おい、結界がはってあるぞ。どうやって入るんだよコレ」

「さすがよく視てるね。ほら、横にあるコンソールに魔力を流したら通れるようになるから」

「先にそれを言えよ。危うくぶつかるところだっただろうが」

「個人的にはぶつかっただらそれはそれでおもしろかったんだけどね。入学要項を読んでないのが悪いんだよ。赤字で最初の方に書いてあっただろう？」

確かに読んでなかったがそれを知ってて言わないこいつもこいつである。

真面目に見えて意外に人が悪い主に悪態をつきながら春斗はコンソールに手をかざした。その手の先から淡い光がほとばしると即座にその光は中へと吸い込まれていく。

- 魔力ノ吸収ヲ確認。認証中……データバンク一件一致。一年生獅童春斗ト確認。登録完了シマシタ。ヨウコソ白桜学園へ -

「一回登録すると次からは通れるようになる」と書いてあったけど「そうみたいだな。さつさと登録して中に入るぞ」

音声と同時に校門の間の空間が波打ったように歪む。どうやら境界を通れるようになったみたいだ。次に深夜が登録するのを終える

と二人は中へと入って行った。

魔法学校に限らず魔法を介した機関の大半は魔術と電子機器を混合した結界で保護されている。結界に使用されている術式を起動しているのはそこに在籍している魔法使いの魔力であり、彼らが空気中に自然に発散している魔力を吸収し蓄積し続けることで発動されている。大多数の魔術師の魔力からなるこの大規模魔術はそれこそ魔法の軍隊でも連れてこない限り敗れることはない。そのため中の機関では一定水準以上の安全性が保障されている。

その結界のおかげで校内では自由行動ができるため図書棟の場所だけ教えてもらおうとさっさと深夜から別れた春斗だったのだが、当の本人は図書棟の入り口で立ち尽くしていた。

- - 本日物資搬入のため閉棟 - -

「……嘘だろ」

入り口の前に貼られた紙を見つめがっくりと肩を落とす。目的を見失った今テンションはただ下がりである。式の開始まではまだ二時間近くあった。校内を見学しようかとも思ったが校内の見取り図は持ってきていない（資料はすべて深夜任せ）。

「ふわあつ……他にやることないしな。仕方ない。寝るか」

やる気の減退で急激に襲ってきた眠気に素直に従うことにする。今日は暑くもないし風も気持ちよさそうなので屋上で寝るのがいいかもしれない。そう判断すると魔法で風を呼ぶ。

(階段を昇るのも面倒だしな)

先ほど校内で魔法を無断で使用してはいけないと深夜から聞かされてはいたが誰も見てはいないし問題はないだろう。もう一度周りを確認した後一気に屋上へと舞い上がった。

「……………手を取り……………学んで……………課外活……………」

(……………何だ?)

まどろむ意識の外から声がとぎれとぎれに聞こえてきた。どうやら寝てる間に後から人が来たらしい。時計台の上で寝ていたの上にいるこちらには気づいてないようだ。

時計に目をやると式の三十分前である。そろそろ時間なので眠気と格闘しながら仕方なく体を起こすと声の主が見えた。後ろを向いているので顔はみえないが長い黒髪の女の子である。手に長い紙を持っていてるところを見るとどうやら挨拶文を読み上げているらしい。

(新入生代表は深夜だからここの生徒会長か?)

それにしても覇気がないというか貫禄がないというか弱弱しい後ろ姿である。などと考えていると少女が読むのをやめ頭を伏せてしまった。どうかしたのかと様子を窺うと時折肩がわずかに上下して

いる。

（泣いているのか？）

非常に気まずい。嫌な場面に出くわしてしまった。見つかると面倒なので巻き込まれないうちにさっさと退散しよう。

普段ならすぐにそう考えて屋上からこっそり降りるところなのが、春斗は何故か彼女の後ろ姿から目を離せず、そこから離れることができなかった。自分でも知らず知らずのうちに彼女の方へ歩み寄ってしまう。

（今日の俺はどうかしてるな）

ほんの出来心だったのかあるいは単なる気まぐれか。彼女に声をかけようと思ってしまった。

「どうかしたんですか？」

後ろから彼女に声をかける。突然声をかけられた少女は驚いて振り返った。振り向いた彼女は非常に可愛いらしい顔をした女の子だった。目尻にたまった涙と気弱な雰囲気が見事に似合っている。

「あ、あ、あ、あの……えっとその……」

「ああ。俺はこの新入生ですよ。ホラ？」の校章がついてるでしょう」

急に声をかけられたからか泣いている現場を見られて動転したからか、彼女は顔を真っ赤にしてテンパっている。相手を落ち着かせる意味も込めて平坦な口調で自分の立場をあかした。

ここで叫ばれてはたまったもんじゃない。

「えっと、わ、私も新入生です」

「へえ。すると君は新入生代表なのか？」

「は、はい」

少しは落ち着いてくれたようでこちらの言葉に返事を返してくれた。だが、内容に驚かされたのはこちらだった。どうやら深夜と同じく入試を満点で通過した天才が他にもいたらしい。

見た目はまったくそうはみえないが、よく視ると確かに出てる魔力の欠片は洗練されている。人はみかけによらないということだろう。

「まあいい。それでなんで泣いてたんだ？ 俺で良ければ話を聞くが」

「……………それは」

「無理にとは言わないが話せば何か楽になるんじゃないか？」

「……………実は」

少し迷っていたようだが少しでも悩みから解放されたかったのだろう。やがて話を聞かせてくれた。

下に降りて話を詳しく聞くとどうやら新入生代表としてやっていけるのか不安だったらしい。新入生代表に選ばれた生徒はここから一年間さまざまな行事で学年代表としての責務を果たさねばならない。ましてやここは魔法使いの卵の中でも特に優秀な人材が集まった学園。はたして自分は本当に彼らの上に立てるほど優秀なのかと。

(自信がない、ねえ。入試トップの実力者が何を言ってるのやら)

ギリギリで受かった俺への嫌味かそれとはか思ってしまったが話せば話すほど泣き出しそうになっている彼女を見るとそんな言葉は

かけられなかった。

「それにその、人前に立つのが初めてで。練習では何とか出来たんですけど本番を想像しちゃうとどうしてもうまくしゃべれなくてもうどうしていいかわからなくなっただんです」

さらに本番前にうまくいかなくなって不安になったということかだが、成功するしない以前に一つ気になることがあった。

「なら何故辞退しなかったんだ？ 今年も代表がもう一人いるんだ。そいつ一人に任せてもよかったんじゃないか？」

「それは……………」

彼女は俺の言葉に返事をせず目を伏せてしまった。スカートの裾をきつく握りしめて何かをこらえている。彼女にも何か事情があるみたいだ。

(さて、どうするかな)

彼女が代表になるしかないというならそう考えるしかないだろう。幸いなことにもう一人の代表者は深夜である。正直あいつと二人でやるのなら何とかなるだろう。

問題はもうひとつの代表者挨拶のほうである。こちらは練習して時間もない。せめて何か気が楽になるものがあればいいのだが。

(そういえば面白いものがあつたな)

つい先日知り合いの道化師が使っていた魔術を思い出した。正直あの時は使い道がよくわからなかったのだが今使えるかもしれない。

「代表者の責務については今はどうしようもないが、代表者挨拶の方は何とかなるかもしれない」

「本当ですか!！」

うつむいていた彼女が頭をあげてこちらを見てくる。期待をこめたまなざしでこちらを見つめてきた。本当に困っていて藁にもすがりたい思いなのだろう。そこまで期待されると希望に添えるか若干不安であるが、その不安を彼女に気取られないよう多少大げさにふるまうことにする。

「ああ。俺は魔法使いだ。そんな俺にできることは魔法を使うだけ。だが魔法は不可能を可能にする力。だから俺が君の不可能を可能にできるよう特別な魔法をかけよう。さあ、目を閉じて」

「!?!?!? ……あ、あ、あ、あのそれって」

俺の台詞を聞いたとたん彼女は真っ赤になってうつむいてしまった。今の台詞そんなに恥ずかしかっただろうか。ちよっとカッコつけていってはみたが。

「この魔法にかかればきっと君は成功する。騙されたと思ってかかってみるといい」

「でも……そ、その……わ、わたしはじめてで……」

人から魔法をかけられたことがないなんて珍しい人もいたものだ。確かに初めて魔法をかけられる相手が先ほど知り合った人物ならば不安だろう。ここは少しでも不安を和らげてあげないと。

「大丈夫。痛くもないし、すぐに終わるから。ほら、目をとじて」

「~~~~~っ?!?!? ……わ、わかりました。お願いします」

不安を和らげるために手を握りながらできるだけ優しい声で説得する。それが功を奏したのかそれに頼るしかないとおもったのか、何度か俺の顔をちらちら見た後やがて祈るようにかたく目を閉じた。やはり不安なのだろう。蚊のなくほどの震えた声でお願いされた。

「そ、その……できるだけ優しくお願いします」
「ん、任せろ」

魔法かけるためにほほに手をあてて顔を固定する（その際さらに顔が真っ赤になり何故か少し口元をつきだしてきた）。反対側の手を目元に向けて集中する。記憶を呼び起こしあの時視た道化師の術式を再現する。そしてそれを本人のご要望通り丁寧にかけた。

「さあ、もう目をあけてもいいよ」
「？ あの、もう終わりですか？」
「ああ、終わったよ」
「????? そうですか」

何かに戸惑っていた様子だったが、やがてゆっくりと目をあけた。

「一体何をし……………きゃあ、ひ、羊!？」
「どう、驚いた？面白い魔法だろう？」
「魔法って……………そ、そういうことでしたか」

どうやら彼女には春斗が羊に見えているらしい。
春斗がかけたのは対象の認識を阻害する“幻視”^{イリュージョン}と呼ばれる術式人獣交文の一種で、道化師は“愉快な動物園”と呼んでいた。仰々しく名前が付けられているが効果は、かけられた人に見ている人全てを動物の姿へと誤認させているだけである。ついでに二頭身にかわいくデ

フォルメされるといっておまけつきで。要は人が動くぬいぐるみに見えるのである。

緊張した時は群衆を野菜だと思えというし、この魔法は彼女にとつてきつと効果的だろう。そう思つてふと彼女の方を見るとまた顔を赤くして縮こまっていた。よく顔を赤くする子である。

「これならみんなが人に見えないし、緊張も多少ほぐれるんじゃないかな？」

「驚きました、こんな魔法があるんですね。でもこれなら確かに緊張しないかも。ありがとうございます」

そうお礼を言うと彼女はこちらをしきりに見つめてきた。制服を着た二頭身の動物がしゃべる様子は見てて楽しいのかもしれない。こちらは普通に見えているのでそう見つめられるととても恥ずかしい。耐えれなくなって目をそらして時計を見ると、時計の針は式開始五分前をさしていた。

「つとそろそろ時間だ。代表はもう会場にいないとまずいんじゃないか？」

「ほんとだ、もうこんな時間。急いでいかないと」

意外と時間がないことに焦った彼女は急いで階段へと向かったのだが降りる前にこちらへとふりかえる。どうかしたのかと彼女を見たがうつむいて立ち止まっているだけである。気にはなったがこちらも時間がないので靴を取ろうと時計台のほうに向かおうとする。するとそれに触発されたのか意を決したように言葉を紡いだ。

「あ、あの、また何かあったら相談してもいいですか？」

口から出てきたのはそんな台詞だった。こんなことを絞り出すた

めに結構迷ってたみたいだ。多少面倒ではあるが乗りかかった船である。それに彼女に深夜と話をつなげるのも簡単だ。だからそんなに不安そうな目で見られなくても春斗に別段断る理由はなかった。

「構わない。またここで相談をうけよう」

「ありがとうございます！ またお願いします、優しい羊さん」

頭をさげてそういうと彼女は明るい笑みをうかべて屋上を去って行った。去り際にみせた彼女のその笑顔に春斗は不覚にも見惚れてしまっていた。

（やれやれ、やっかいなことになったな）

軽く安請け合いものすでに少しめんどくさい。けれど請け負ったことに悪い気はしなかった。

（まあ、退屈な学園生活を過ごすよりはましか）

そう思うと時計台へ飛びあがり、枕と布団代わりに使っていた鞆と学ランを回収する。それを身につけていると眼鏡も落ちていくことに気づく。どうやら眼鏡をかけずに彼女と話していたらしい。よく深夜からかけているときと外したときで雰囲気はかなり違うと言われるので、次に会ったときに彼女は少し戸惑うかもしれない。面白い顔が見れそうだなと笑いながら眼鏡をかけると再び屋上へと飛び降り、階段へと向かう。

（ああ、そういえば名前聞いてなかったな）

屋上のドアに手をかけたところで唐突に気がついた。どうやら一

番肝なことをすっかり忘れていたようだ。そんなことに気がつかないぐらいには冷静ではなかったのかもしれない。そのことに内心苦笑しながら階段を下って行った。

第一話 屋上と邂逅と（後書き）

学業の方が忙しくて少し時間があきました。またテストが続きます
がなるべく九月には投稿します。

第二話 挨拶と策略と

鞆と眼鏡を拾うといそいで階下へと下り校庭へと出た。そのまままっすぐ体育館へ向かう。朝、深夜しんやについて一度行っただけなのに、で場所^{ところ}に迷うことはない。時間がさし迫っていることもあり、できるだけ急いで向かう。だが、体育館が見えてきても辺りには人っ子一人いなかった。

まだ人がいるだろうとたかをくくっていたがこの状況は本気でマズい。もし式に遅刻でもして深夜にでも見つかるものならあとで確実に雷が落ちるだろう。それだけならまだいいが、もしまかりまちがって実家に連絡がいこうものなら大変なことになる。そうなれば俺は地獄への片道切符を渡されることとなるだろう。向かう先にはもちろん”鬼”^母が待っている。

まだ見ぬ恐怖に脅えながらはしっていくとようやく体育館へと辿りついた。入り口を見ると受付の人がまだ座っている。受付の人はこちらに気がついたのか手をあげてこちらに合図を送ってきた。どうやら早く来いということらしい。

受付にたどりつくくと座っていた青い髪の女性から声をかけられた。顔を見ると可愛さと綺麗さが混同したような美少女である。だが現在少女は笑顔の向こうに見える怒気のオーラのせいで魅力が影をひそめていた。

せつかくの可愛い顔が台無しである。もっとも少女を怒らせている原因は俺だろうが。

視線に耐えられず目線をそらして彼女の首もとをみると校章が示す数字は”？”である。自分よりも一つ上の先輩だ。入学式のお手伝いでよばれたのだろうか。

「一年生の獅堂春斗君しおどうはるとで間違いないわね」

「はい」

「ずいぶん遅かったわね。君が最後よ。まったくこんな時間まで何をしていたの？」

「ちよつと寝坊しまして」

「まったくさっきの子たちといい今年の一年生はどうなっているのかしら」

「すみません。朝に弱いもので」

渡される書類にサインしながら問いかけられる質問に適当に答える。寝ていたのは本当だから間違いというわけでもないだろう。

話を聞く限り先ほどの屋上の子も無事に間に合ったようであった。気弱な彼女のことだからこの目の前の少女に詰問されたときかなりうろたえたに違いない。その場面を想像すると少し笑いそうになつてしまふ。

・ - 前言撤回。笑つてしまったのだろう。目の前の少女の眉尻がより一層はねあがっている。少し殊勝な態度で臨んだほうがよさそうだ。

そう思うと全ての書類に素早く目を通しサインを終え、彼女へと手渡した。

「まあいいでしょう。それよりもこれをどうぞ」

こちらの態度に半ば諦めたのか溜息を吐くと少女は書類を受け取って内容を確認する。その作業を終えると後ろのダンボールの中からこちらに何かを差し出してきた。受け取ったモノを確認するとどうやらディスプレイ内蔵型の小型端末のようである。

「学内からの連絡事項はすべてその端末に行くようになっていきます。身分証明証の代わりにもなっていますから肌身はなさず持つておくように。それと校内での私的な小型端末の使用は基本的に禁止されているので個人的なデータを読み込んでおくことをオススメす

るわ」

「了解です」

受け取った端末をポケットにしまっておく。時間もないので登録やデータの移動は後で纏めてやることにしよう。

「まもなく式もはじまるわ。もう一席しか空いてないでしょうけど急いで入りなさい。それと」

「まだ何か？」

「ようこそ白桜学園へ」

そういうと少女は春斗へと手を差し出してきた。その顔には満面の笑みを浮かべている。どうやら握手を求められているらしい。

差し出された手に戸惑いを覚えたものの、少女の行為を無下にするのも悪い。俺は同じく笑みを浮かべて彼女の手をとり、しっかりと握り返した。

「……」

「どうかしましたか先輩？」

「いやなんでもないわ。これからよろしくね」

春斗のその行為が意外だったのか少女は笑みを崩して戸惑いの表情を浮かべる。だが、それも一瞬のことですぐに笑顔を浮かべて握り返してきた。お互いに口から笑い声ももれだす。

「そろそろ始まるわ。それじゃあまたね獅堂君」

少女は手を離すとそのまま春斗を体育館へと促す。何か嫌な予感がしたがこれ以上ここにいる必要もないので、春斗は少女に一礼すると促されるままに体育館の中へと足へ向けた。

「どうだった彼は？」

体育館へ向かった彼をみているとふいに後ろから声をかけられた。声のほうへ振りかえるとそこにはよく見知った銀髪の少女が立っている。短くそろえた髪に中性的な面立ちが相まって格好よくきまっている。事実女性ファンも多いのだが。

「どうだったどころかじゃないわよ浮羽ちゃん。みてこれ」

浮羽と呼ばれた少女はそういつて差し出された手のひらをみる。その途端さしだされた少女の手から淡い光が輝き、魔法陣が描かれていく。

少し興味深そうにその陣を覗き込んだ浮羽だったが、やがて怪訝な顔を浮かべて少女に訊ね返した。

「なんだ何ものってないじゃないか。彼は握手しなかったのか？」

「

「したわよ。したけど何も書かれてないのよ」

「どういうことだ美桜？」

浮羽は美桜と呼んだ少女の返答に首をかしげた。本当に彼女の魔法が発動したのだったらあって然るべき結果がここにはない。

「獅童君がやったことは至極単純よ。私が使おうとした魔法に対

してそれを掻き消すタイプの魔術式をぶつけただけだわ」

美桜が今展開している魔法は”読取^{リド}”と呼ばれる基本魔術式を使ったものだ。”読取”は対象に触れることでその情報を知ることができるという魔法である。美桜のはそれを少しアレンジしており、触れることで対象の魔力を読み取ってその人のある程度の力量がわかるというものだった。

「なるほど。確かに内容は単純だな。だがいうように簡単なことではないぞそれは」

魔法というものは一般的に基本となる魔法陣に魔術式を増加または消去させていくことで、その陣によつて発動する魔法形式が決まる。例えば火の基本魔法陣だけで魔法を発生させれば”火球”が発生するだけだが、そこに分裂の術式を書き加えれば”炸裂弾”になり、収束と直線の術式を加えれば”火線^{レザ}”に、収束と固定と斬撃の術式ならば”炎刃”にもなる。様々な術式をつけ加えることで発動時間や所要魔力量の増加、操作性の難度の上昇などいくつかの制約は付きまとうが、組み合わせ次第で独自の魔法を作成することができる。そのため発動する魔術内容は似通っていてもそれを構成する魔術式が異なることもある。

「ええ。少なくとも私の使っていた基本魔法式を完全に見抜いてないと不可能ね。はあ、この日のために隠蔽や擬態の術式も組み合わせで作った自信作だったのにな」

「まあ現に彼以外に試した入学者は気づいた奴もいたにしろ気づかれてはいなかったしな。まったく彼はどんな手品を使ったのやら」

術式の組み合わせ次第でいかようにも魔法は発動できるが、逆に術式に矛盾が生じると魔法は全く発動しない。一例としては同じ時間軸内に前進と後退の術式を組み合わせてしまう場合である。これを利用すれば発生段階であれば相手の魔法の発動を止めることができる。

これを利用して獅堂は美桜の魔法の発動を防いだのだろうか美桜の魔法にもかなりの隠蔽工作がされている。正直初見で見抜けるとは到底思えないのだが。

「だが今回の件ではつきりしたな。獅堂の入試の時の成績はやはりマグレではないらしい」

「そのようね。正直言つて彼の成績を見たときは目を疑ったわ。筆記試験はほとんどの科目で平均点以下しかとれていないのに最難関の魔法理論学だけは満点。教授によると満点じゃ収まらないほどの完璧な回答だったらしいわ。いったいどんな風に勉強したらそこまで極端になるのかしら」

かなり極端な成績のため一時期彼にはカンニングの疑いをかけられていたようだが、答案内容に独自の理論がふんだんに盛り込まれていたため一蹴されたようだ。だがその成績が真実なら本当に彼の頭の構造がどうなっているのか謎である。

「まあ私はそっちよりはもう一つの結果のほうが気になっているがな。なんせアイツは魔力適正で唯一実技試験を満点通過したんだからな。おまけに最短での試験の終了だから驚きだ。試験の映像をみせてもらったがかなりの実力者だなあれは」

「でも彼は”獅堂”の人間でしょう？ おまけにあの”剣帝”の

息子なのだからありえない話ではないんじゃない？」

「それを差し引いてもだよ。それに試験官もそのネームブランドがあるんだから油断するはずがない。その中で最速タイムをたたき出したんだ。いやせひとも一度手合わせ願いたいものだ」

どちらの部門においても話題をかない男である。正直言って全教科を満点で通過した最優秀者二人のほうが注目されてしかるべきではあるのだが、美桜と浮羽の興味はその二人よりも話題性のある春斗に向いていた。

「まあ本命の彼のデータはとれなかったけど目ぼしい子たちのデータはとれたからおおむねよしとしましょう。今年は特に逸材が多いみたいだし。それに彼の才能の片鱗だけでも見る事ができたのはよかったわ」

「そうだな。あとは直接会って話を「会長」」

美桜と浮羽の話は第三者の声に遮られた。声がしたほうからは少女が一人かけてくる。

「会長まだ受付にいたんですか！！ 式がもう始まりますよ！」

委員長も委員長です！！ なんて会長を呼びに行ったまま帰ってこないんですか！？」

「そういえばそうだったな。美桜、入学式が始まるらしいから早く行ったほうがいいぞ」

「なんで今伝えるんですか！！」

知らぬ間についつい話し込んでしまったようだ。やはり彼は話題に事欠かない。とはいえ仕事を忘れて話し込んでしまったのだからあとで皆に謝っておくことにしよう。

「結城副会長が代わりに裏で進行をすすめています。会長挨拶の準備もあるので早く行ってください！」

「ごめんねすぐいくわ。空ちゃんと浮羽ちゃんはここの片づけをお願いします」

もう少し彼のことを話したかったところではあるがここは素直に与えられた役目を果たすことにしよう。責任のある立場である以上放棄するわけにもいかない。

そう気持ちを切り替えると美桜は暗幕で指示を飛ばしているであろう副会長のもとへと向かった。

第二話 挨拶と策略と（後書き）

遅くなりました。葉月です。

十月から解剖実習に並行してテストとレポート地獄に陥っています。
年内は不定期になるかもです。

第三話 朱と蒼と

受付の少女と別れてそのまま体育館へ入るとやはりというべきか中はすでに新入生であふれていた。

本当に俺が最後だったらしい。周りを見渡して空いている席（といっても一つしかないのだろうが）を探してみると最後尾の端が空いていた。式も始まりそうなのでそこに急いで座ることにする。

（ギリギリではあったがなんとか間に合ったな）

席について一息つくと思わず安堵の溜息を漏らしてしまった。危うく新学期早々から血を見るところだった。娑婆に出た早々魔窟^{我が家}へと引き返すのはごめんである。

（それしてもさっきのアレは一体何のつもりだったのだろうか？）

先ほど受付で出会ったあの少女。あの少女の手の内に隠されていた術式は”読取^{リテイク}”。構成された術式からみるにこちらのデータ、つまりはこちらの手の内を探るつもりだったのだろうか。

（だが何のために？ 入学試験のときに一般的なデータはとられたはずだ。生徒には開示されてはいないかもしれないがそもそもそこまでして必要なデータなのか？ それとも生徒を使った学園側のテストか？ それとも……）

いくつもの考えが浮かんではくるものの明確な答えは出ない。少女の術式がかなり高レベルなものだったのでさっきは咄嗟に防いでしまったが、今思えば少々まずかったかもしれない。手の内は晒さ

ずすんだがさらなる面倒事に巻き込まれるリスクをあげてしまった。すでに問題を一つ抱え込んでいる以上さらには増やしたくない。

（いずれにしても時がたてば分かることか。何事もなければよいのだが）

一抹の不安を胸に溜息を洩らす。先行き不安な未来を考えると自然と眉間にしわが寄る。

「あの、大丈夫？ 顔色悪いわよ」

そうこう頭を悩ませていると隣りから声がかかる。横を向くと隣に座っていた少女がこちらを見ていた。赤い髪につり上がった目が特徴的だ。二本のはねた髪はくせ毛だろうか。長い襟足は三つ編みで一つにまとめてある。

「気分が悪いようなら外に出て校舎に入れば保健室が……」

「いや大丈夫だ。ちよつと考え事をしていただけだよ。でもありがとう」

「そう、ならいいけど」

どうやら心労がおもいつきり顔に出ていたようだ。どうやら少女にいらぬ心配をかけたらしい。軽く訂正と謝罪をしておく。

そういえばこの少女も受付の彼女とあっているのだろうか。あの行為が俺だけが対象でなかったと分かるだけでも充分である。話しかけられたのも何かの縁かもしれない。訊いてみることにしよう。

「なあ、一つ聞きたいんだが」

「何、突然？ 保健室ならあっちの校舎に」

「そうじゃないんだ。その、こんなに後ろに座ってるってことは

君もさつきここに着いたのか？」

「そうだけど……それがどうかしたの？」

少女がいぶかしげにこつちを見ている。いきなりこんな脈絡もない話を振られたら戸惑うのも当然だがこちらにも事情がある。そのままさつきと聞いてしまうことにしよう。

「受付に青い髪の少女は立っていたか？」

「ええ。立っていたわよ。むしろ私が来た時にはその人しかいなかったし」

「その人と握手をしなかったか？」

「握手は確かにしたわ。でも何で知っているの？　そもそも何でそんなことを」

「いや大したことじゃないから気にするな。もう大丈夫だ。ありがとう」

何か言いたそうな顔をしていたが聞くことだけ聞くと話を打ち切る。手に入れた情報をもとにまた思考の海へと落ちていった。

(これで俺自身を狙ってきたという線は薄くなったな。まだ偽装という線もあるが。やはりテストの一環だったのか？　それとも何か別の目的で……)

「……ねえ。ねえ。ねえってば。ちよつと聞いているの！」

色々の可能性を示唆していると隣の少女から再び声がかかった。考えに没頭していたせいか気づくのが遅れたらしい。気づいた時には語気がすでに荒かった。

女性を怒らせたのは本日二度目だなと半ば現実逃避ぎみに考える。何をいわれることやら。

「すまない。ちょっと考え事していて。それよりも何かな？」

「微妙にはぐらかされた気がするけどまあいいわ。それよりも私も訊きたいことがあるのだけれど？」

「……ああ、握手なら俺もしたぞ」

「そんなことじゃないわよ！ それについても色々聞きたいけど今は一つだけ聞くわ。あなたは どうしてこんなにおく」ただいまより入学式を始めます。新入生は静粛にお願いします。」

何か訊いたようだが肝心の最後がアナウンスで途切れてしまった。何が訊きたかったのだろうか。

「ごめん。もう一回言ってもらってもいいかな？」

「……もう式が始まるみたい。式が終わった後で訊くことにするわ」

「？」

何だったのだろうか。自分から訊いてきたのに突然自分でやめてしまった。案外真面目な子なのか。

（まあ後でわかることか）

そう思うと春斗は前を向き式の開始を迎えることにした。

式が始まると定番ともいうべきかまはずは学園長の話からスタートした。

壇上に上がってきたのはひげを蓄えた短小矮躯の初老の老人だ。しかし、その小さく衰えた姿とは裏腹に誰もが登場した時から目を離せないでいる。それほどまでに彼からは、えも言えぬ迫力がにじみ出ていた。そして誰もが認めるほどの肩書も携えてもいる。彼の名は”白杯絃馬”^{しつぎげんま}。日本最高峰の魔術師にして”日本退魔協会”の長、そして四聖の一つ”白杯家”の長である。

日本には”四聖”と呼ばれる四つの名家がある。”白杯”、”黒杖”^{じょうちょう}、”蒼間”^{そうま}、そして深夜の属する”朱前”^{しゅぜん}。これらの四家ははるか古来から日本に存在し、白杯は行政、黒杖は立法、蒼間は司法、朱前は軍事を掌ることでの国を陰から支配し続けていた。

また四聖家の一族は莫大な魔力を保有する者が多く、それぞれの血族のみが使える強力な秘術をも有している。そのため優秀な魔術師を多く輩出しており、日本国内だけでなく世界からもその力を認められている。その著名な一族の長というのは多くの魔術師から畏怖と憧憬をうける存在なのである。

「皆の者まずは入学おめでとう」

彼の一言一言にここにいる全ての者が耳を傾けている。若い魔術師たちにとって彼の言葉はそれほどまでに重かった。

「これから君たちは三年間この学校で多くのことを学ぶはずじゃ。幸いこの学校は魔法使いの教育という点では大きな力を持つておる。その中で自身の才能を開花させ、力をもつ者もあらわれるじやろう。じゃがゆめゆめ忘れるな。魔法は人の”意志”によって紡がれるものじゃ。たとえ強大な力を持つとも弱き心で力を使えば、魔法は乱れやがて己が身や大切な者をも飲み込んでいくじやろう。逆に強き心で魔法を行使すれば己の理想を現実に、どんな不可能をも可能にする力を得るじやろう。時としてそれは根本的な魔力総量を覆す

ほどにな」

それまで静かに話を聞いていた新入生のざわめきが起こった。魔法を行使するものにとつて魔力の容量が重要なファクターを占めているということは周知の事実でありこの世界の常識でもある。事実入学試験の際も魔力総量を測られその値によつてランク付けされており試験に受かったものの多くは一番上のA判定かB判定の者がほとんどである。

魔力が多いということはそれだけ他者よりも大きく複雑な術式を行使できるということである。魔力量「火力と考えている多くの者は彼の考えに納得できないだろう。

「ふむ。納得できないものも多いようじゃが今の言葉は心に留めておくことじゃな。今年は特に面白い人材がそろつておる。現在上位を走っている者も思わぬところで足をすくわれるかもしれんぞ」

そういつて彼は言葉を締めくくった。言葉の途中で心なしかこちらを見られたような気がする。それどころか教員席からもいくつか視線を感じるがおそらく気のせいだろう。

というより気のせいということにしておきたい。仕方なかったとはいえやはり入学試験であんなに暴れ倒すべきではなかったな。教員たちにいろんな意味で完全に目をつけられているようだ。

彼の言葉に戸惑いが隠せないのか会場内はいまだざわついていたが入学式は続いていく。お偉いさんの話やら祝電やらが終わった後は生徒会長挨拶の番になった。

続いていく退屈な話にすでに眠気が体を支配していたがそろそろ深夜の出番でもあるので頭を起こすことにする。演説中に眠つてるところを見られると後がうるさいからなと考えていると生徒会長が壇上に姿を現す。まだ眠かったのだがその姿のおかげで一気に目が

覚めた。

壇上に現れたのは先ほど受付で会ったあの少女である。隣を向くと同じく少女も驚いた顔をしていた。まさか生徒会長だったとは。

「はじめまして新入生のみなさん。私が当校の生徒会長の白杯美桜おです。ようこそ白桜学園へ。これから皆さんは当校で三年間を過ごしていくことになりますが……」

壇上の美桜は笑顔をふりまきながら挨拶を述べている。新入生の何人かは春斗と同じように驚いているようだが、そのほかの生徒、特に男子生徒達は彼女の容姿もあいまってその笑顔の魅了みされていた。

（俺にとつては悪魔の微笑みにしか見えないのだが）

心なしかしてやったりといった声もきこえる気がする。そう考えていると美桜が視線をふと春斗のほうに向けてきた。そのまま目が合うとほんの一瞬ではあるが美桜は笑みを浮かべる。

……前言撤回。あの女は確実にこちらを嵌めてしてやったりと思っっている。

（それならばさっきのあれは学園側の試験という線が濃厚か。まいったな。また一つ先生方に目をつけられる理由が増えてしまったかもしれない）

そんなことを考えていたらそうこうしているうちに生徒会長の話は終わってしまった。思った以上に動揺していたのかあつという間に終わってしまったように感じる。彼女には本当にしてやられた。おかげで目も覚めたが。

驚愕の生徒会長挨拶が終わると次は新入生代表の挨拶が始まった。壇上に深夜と屋上の少女が現れる。そのまま二人は並んで中央に立つ。

こちらを向いた深夜の顔をみると珍しいことに緊張しているのか若干顔がこわばっていた。意外と深夜でも緊張するのだろうか。それともあり得ない話ではあるが隣の少女に緊張しているのか。

その肝心の少女をみると緊張しているのか少しうつむいて泳いでいる。ふと魔法が解けたのかと不安になって彼女の目をみるが”愉快な動物園”はまだかかっていた。ならば後は彼女の気持ちの問題だろう。

春斗が彼女を見ていると彼女もこちらを見つけたようで目があつた。がんばれと口で形をつくりエールを送っておく。

それに触発されたのかどうかはわからないが彼女は前を向くと挨拶文を述べ始めた。

「新入生代表挨拶。私たちは志と希望を胸に抱いてこの学校へ進学し……」

多少たどたどしいところもあるもののおおむね大丈夫そうだ。このままいけば挨拶は無事に終わるだろう。

心配事が一つ減ったと胸をなでおろしていると隣から視線を感じた。みると隣に座っている少女がこちらを値踏みするかのような目で見ている。また何かしたのだろうか。

「今度は何かな？」

「さっきあの子があなたを見ていた気がするのだけれど知り合いなの？」

あの子とは今壇上にいる少女のことだろうが、春斗が少女と知り合いだったら彼女にとってどうだというのか。こちらの何かを探っ

ているようだし不用意な返答は避けたほうがいいのかもしれない。

「仮にそうだとしたらどうなんだ？」

「別に。なんでもないわ。それともう一つだけ聞かせて。あなたはなんでこんなに式に来るのが遅かったの？」

「……単に寝坊したからだが」

「信じられないわね。本当は誰かに「悪いがここまでにしよう」

式が始まる前に言いかけた問いは今の流れでおおむね理解した。

春斗が壇上の少女と事前に会っているのかどうか知りたいのだろう。とはいえ彼女の目的が分からぬ以上はいそいそですと答えるのは憚られる。とにかく一旦話を切って頭を整理することにしよう。

「急に何？」

「俺は真面目に話を聞いてるんだ。悪いがこれ以上の私語は後にしてくれ」

「いままで散々寝てた人が何をいまさら」

「それに君が言ったんじゃないか」式の後で訊く」と

「っ！？ それは確かに言ったけど。でも！」

「答えないとは言っていないだろう。式が終わったら話を聞こう」

「……絶対に答えなさいよ」

そついうと彼女は春斗から顔をそむけた。また怒らしてしまったようだ。が面倒事を抱え込むよりはましである。彼女には悪いが今のうちにうまい言い訳を考えてごまかすことにしよう。

とはいえまずは彼女にいった手前少しは真面目に話を聞くとする。内容を聞く限り終盤に差し掛かったようだ。もう間もなく終わるだろう。

(とにかく彼女の挨拶は無事に終わりそつでよかったな。後は深

夜とのことだが今日の放課後にでもあの子と深夜を交えていつしよに話を……)

「……以上をもちまして新入生挨拶とさせていただきます。新入生代表朱前深夜」

「同じく新入生代表蒼間冬香^{ふゆか}」

(っ！？ 蒼間だと！？ あの子がか！？)

四聖家の内「蒼間」と「朱前」は昔から対立関係にある。もともとは、「退魔」の力を身に宿し魔性は滅すべしと考えている蒼間家と、国を守るために闇だろうが魔だろうが使えるものは全て使つて力を手に入れようとする朱前家との根本的な思想の違いからお互いの術者が何度か衝突を生む程度だったのだが、それも長い年月を経て深い亀裂となりお互いの一族同士がお互いを毛嫌う関係となつてしまった。

おかげでお互いの術者が顔を合わせると争いが絶えない。術者同士の小競り合いで済めばいいが、その争いは時として血で血を洗う抗争へと発展することもある。それほど両家は険悪な関係なのだ。

深夜が挨拶中緊張していたのも無理はない。なにせ隣に立っているのは幼いころから敵だと教えられてきた蒼間の人間。家の命令に忠実につき従つて生きてきた深夜にとつてはどう接していいのかさえ判断に困つたことだろう。そして獅堂が朱前に忠誠を誓っている以上それは春斗も同じである。

(あの子が……俺の……敵)

知つてしまった以上もう下手に関わることはできない。屋上で会うわけにもいかないだろう。幸いまだ出会つたばかりだ。その時間を切り捨てるのは簡単である。

だが、冷静な頭と裏腹に何故か春斗の心は落ち着かないのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189v/>

紅の皇帝

2011年12月29日06時52分発行